語釈 ： インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語（78）
(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後　藤　　寛

本連載は大学の科目なら Ogden の Basic 言語を背景にした英語学ゼミでの各論で、今日的な「英語学特論」ということにもなろうが学部レベルのものでほぼ基本事項であり、本会での EP 本実践では必須のもののはずだろう。'The Step-by-Step and Basic-through-Basic (SSBB) Way of Learning Basic' としては不透明ともなる EP 本実践であるが、やはり Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* などで示される言語観全体から眺望され「全体系(system)から見る部分(part)」として捉えられない限りは実際には見えないはずだろう。今回は２例を見るとともに、重要な Basic 世界語彙 'what' などの確認もしたい。

(1) I've done more in less than 4 years than Biden's done in more than 40 years, including for Black America. Biden has been a part of every failed decision for decades. Bad Trade Deals, Endless Wars, you name it, he has shown a complete lack of leadership. He is weak & shot !!! 🤔 (June 15, 2020)

▲われわれが日常的に目にする英語は Basic 言語では書かれていない。今回、この文を秒数にして何秒で高速黙読できたか？英文を常に発話されたものとも意識し音感のともなうリズムに乗った読み方をするのが要領である。英語力が徐々についてくる。リズムを壊す(out of rhythm)読みではいけない。[l]音・[r]音の[la, li, lu, le, lo]・[ra, ri, ru, re, ro]を日本語音のラ行「**ラリルレロ**」の音感で聴いてしまう日本人であるが、この文例で改めて子音[l]音と半母音[r]（米音の場合）の現れる箇所を次でまずはすべて確認しておく。

(1)' I've done mo**r**e in **l**ess than 4 (fou**r**) yea**r**s than Biden's done in mo**r**e than 40 (fo**r**ty) yea**r**s, inc**l**uding fo**r** B**l**ack Ame**r**ica. Biden has been a pa**r**t of eve**r**y fai**l**ed decision fo**r** decades. Bad T**r**ade Dea**l**s, End**l**ess Wa**r**s, you name it, he has shown a comp**l**ete **l**ack of **l**eade**r**ship. He is weak & shot !!!

どの箇所でも[l], [r]音の正確な２区分が必要となるが、**特に聴取**が日本語民族には実に難点である。２行目の failed 中の[ld]音、３行目の Endless 中の[dl]音の音響には特に要注目。この種の**音響**は物理学的な音声学(phonetics)で、**音素(phoneme)と意味が関与**する言語的な音韻論(phonemics)とは区別が必要。

内容的にはこれは 2020 年の大統領選の数カ月前、新型コロナウイルス感染症蔓延のなか社会経済活動(social and economic activities)の正常化の叫ばれていた頃の tweet で、Trump 氏の対抗馬 Biden（バイデン）氏に対する当時の思いがよく示されている。「私は Biden が 40 年間で行ったよりもっと多くのことを 4 年間で行ったが、これは黒人のためを含めてのことだ、Biden は何十年間も失敗に終わった結果ばかりを出した、とんでもない貿易、果てしない戦争等々、他にもいくつもある、彼はまったくリーダーシップを発揮してこなかった、ひ弱でガタがきているのだ !!!」という内容である。

この tweet 文例を本連載(22)~(29)、(31)などで見た情報提供の３つの整理法である① **<ABOUT>** 、② **<BECAUSE>**、③ **<PLEASE>** の深層意味素(deep sememes)で考えてみるとよい。「①この件は、②こうであるので、③こうして欲しい」ということ。これは thematic analysis（主題分析）の手法とも結びつく。

政治の世界の words は意味論的に興味深いがどの程度まで内容を「真」だと理解するかという問題がある。本連載(62), (69), (75-sup.)などですでに言ったが Ogden-Richards, *The Meaning of Meaning* (p.151)では「真」(being true)に関し **True^{S}** と **True^{E}** (S：Symbolic / E：Emotive)の２種が提示され注目に値する。symbolically true か emotively true かということであるが、相当に高度な事の見方である。

太線語の形容詞 shot (< shoot)「撃たれた」はくだけた負のイメージ語であることは直感できよう。shot を Basic 世界語彙によりどころを求めれば **shut** と同系。この場合の shot は「使い果たされボロボロになった」のような意味である。This car is shot, it's a lemon.（この車はガタがきていておんぼろだ）のように言える。ただ、これは英語的でアメリカ人ぽい響きがし日本人が言うとどこか抵抗感も伴いもする。

語の意味が metaphor（隠喩）により拡張(expansion)で転じることは当然のことで、これがなければ語の数は無限となりいくつあっても足りなくなる。rhetoric（修辞学）的に文の意味理解上での metaphor 論に関しては一般にあまり理解されていないのが実情に思える。これはまずは simile（直喩）と区別が必要である。EP 本での simile は II で like(p.10)や、比較上での相似・等価(equal)の意味と絡め as (p.62)で提示される。**metaphor** は{meta- (= change) + phor (= to put away)}で Basic 世界語でなら上記、**意味の'expansion'（拡張）**である。一方 simile は similar などと同系語で Basic 世界語彙では **same, seem** などと同系であるが、他の Basic 世界語でなら 'parallel'（並行・平行するもの）ということになる。ここでの parallel は接点があるということで、並行・平行で接点がないのではない。

隠喩の metaphors を Ogden-Richards は electronic references（電子指示）として物理学的、拡張的に見ていたこともここで付け加えてもおこう。*The Meaning of Meaning* (p.70)では … the terms 'idea' and 'conception' … To extend a metaphor which is becoming familiar, these might be regarded as 'electronic' references. と言っている。なお、一時、政治記者でもあった英国の作家 G. Orwell は政治言語(political language)で metaphor などを用いることを戒めたことは確認しておきたい〔本連載(69)参照〕。

下線とした you name it は母語話者は頻繁に用いる。「等々、いくつもある」の意味である。筆者自身、現地アメリカでそれをつぶさに実体験したが彼らは名詞をいくつか羅列したあと You name it.とよく言う

（例、Here we have all sorts of fruits ― apples, oranges, bananas, melons, you name it.）。「それに命名(naming)せよ」が元来の意味でこういう表現の背景にも Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* や、これを裏返したような G. Blocker の *The Meaning of Meaninglessness* で議論される言語哲学的な唯名論(nominalism)を垣間見る。この種の口語風の英語(spoken English)はやはり本国での生活体験で身につくものの１つだと言えるが、本連載(65)の(1)で見た hopefully（願わくば）などもそういう例の１つと言える。

本国で日常的に用いられている英語に手早く慣れるには映画のシナリオ読みの要領があることも付け加えておきたい。自信がついてくる。洋画シナリオの reading でこなれた英語を身につけることができる。本物調の英語の呼吸法を感知する hearing にも手早い。筆者の学生時代に洋画シナリオが世に多く出た。やはりこういうシナリオ中の英語は生きていて現地でどれも一瞬に理解される。アメリカで生活することにでもなればアメリカ映画のシナリオを読んでおくべきとなる。やはり社会言語学(social linguistics)としての構造主義(structuralism)となる。関連しては西部劇映画 'Shane' を題材とした本会 *Year Book* No.66 (2014)「Intertextuality（間テクスト性）から考える Wider Básic Énglish」での拙論も参照されたい。

ここで特別に次の事項に関し触れておくこととする。本連載前回(77)で疑問文には **echo-question（問い返し疑問文）** がある点に触れ、対話でたとえば **"** I went there."―**"**You went where？" や "I saw him then." ― "You saw him when？"などの言い方があることに注目した。上の Trump 氏の tweet text 文をこの観点から次のように **'what'** による echo-question が考えられ、対話での裏返しの形を見ることとなる。

- ＜You've done **'what'**？in less than four years. ― I've done more. More than Biden's done in 40 years, including for Black America.＞
- ＜Biden has been a part of **'what'**？ ― Of every failed decision for decades. Bad Trade Deals, Endless Wars, you name it.＞
- ＜He has shown **'what'**？ ― He has shown a complete lack of leadership.＞
- ＜He is '**what**'？ ― He is weak & shot !!!＞

5 W's & 1 H 疑問詞(5 W's & 1 H interrogatives)は前回言ったように、すべて what の意味をもっていることからしても **'what'** がその要（かなめ）になると考えてよかろう。ここでの４つの echo-questions と上の(1)での text 文とを改めて対照し、じっくり反芻（はんすう）するとよい。これはあらゆる text 文の構成法・構築法とその **thought pattern** を 5 W's & 1 H 疑問詞と並行させ見抜いていく秘技の手法となる。重要なポイントだろう〔EP 本では疑問詞は I, p.30 で初出となり 'what' である〕。

次にこの(1)の tweet text 文を本連載でいくつも扱っている横方向（水平方向）に線的に input され、縦方向（垂直方向）に円環的に回転し output となる「**回転英文母型**」として仮現運動(apparent movement)で動いているように見える Basic 世界語での仮称 ASMOE /ǽsmou/（別名：ASSR）で確認しておく。

・Automatic Sorting Machine for Output English (ASMOE /ǽsmou/) [in Basic]
・Automatic Statement Structure Reader (ASSR /ǽsɚ/) [in Basic]

OUTPUT ENGLISH

STATEMENT					
		THEME : NP	**RHEME : VP**		
STR	**C/C**	**N_1**	**COP／V**	**N_2／N_3／A**	**ADV**
1	φ	I	've done	more	in less than 4 years /
2	than	Biden	's done	φ	in more than 40 years,
3	φ	φ	φ	φ	including for Black America. //
1	φ	Biden /	has been	a part of every failed decision	for decades. //
1	φ	φ	φ	Bad Trade Deals, Endless Wars,	φ
2	φ	you	name	it, /	φ
3	φ	he	has shown	a complete lack of leadership. //	φ
1	φ	He /	is	weak & shot !!! //	φ

（備考）単一斜線（／）は各文での意味的２分割線、各項は **(3±α）語**として実現する。

(N.B.) 本連載(68)でも触れたが **THEME (NP)**は＜what it is about＞、**RHEME (VP)**は＜what is being said about NP＞ということで、このあたりには本連載(68), (69)で触れた Halliday, M.の **Systemic Functional Grammar（SFG：選択体系機能文法 / システム機能文法）**との関わりも見えてくる。文における文頭での主題化(thematization)、文末での焦点 / 重点づけ(end-focus / end-weight)など基本的事項が再確認されてよい。weight（重量）といえば道具(instrument)としての天秤(scale(s))は、意味の問題でその重さ(weight)の均衡(balance)を計量する象徴的な物品と言える〔本連載(67)、前回(77)参照〕。背景で仮説的な thememe（主題素）なる概念も新たに考えられ設定されてよかろうか。

この回転英文母型では動いているように(seem, as if)１項ずつを目で追うわけであるが、たとえば回転寿司店で客は皿に載り実際に回転している寿司のレーン('sushi' merry-go-round)の１つずつ(one by one)を目で追い、目的の寿司に焦点付けをする。通り過ぎてしまったら "あ、あれだ" (Oh, I'll take THAT ONE when

it comes back round.）などと心の中で思い、特別に焦点を定め見ていくこととなる〔語強勢は自然と身にもつくので特に問題はない〕。英語 reading もこれと似た側面を筆者は直観・直感もするがどうだろう。

360 度の回転寿司レーン：We see bits of ‘sushi’ moving round here.

回転する ASMOE (ASSR)モデルは text 文を pattern 化して見るもので、改めて言うが理解法上で有効であると思われる〔このモデルに関しては本会 *Year Book* No.73 (2021)での拙論も参照〕。見方としては母型上の各項に入力された文字に連続的に光をあてていくと、視覚的にその文字列が動き出しいわゆる電光掲示板(electric signboard)のごとく実際には静止していても錯覚で上記、**仮現運動(apparent movement)**として見る(be being seen as if they were moving)こととなる。

電光掲示板を応用した画期的で**特別な reading 訓練用機器の開発**〔本連載趣旨からは上記、仮称としての ASMOE 風のものということになるが〕を期待したい。**高速読み**など**速度調整**もでき**文字が次々と消えていく人工 AI ロボット(robotic)機器**である。学校機関での**英語読解力テスト(reading comprehension test)**評価にも効果的となるはずだろう。文中で内容上重要な語をロボットが感知し自動的に大文字化や太字体化で表示する等々、意味を 360 度回転させ理解するべく**諸々の機能**を備えた**英語読解力養成用機器**の開発である。比喩的に言えば英語の車輪(wheel)を押しても前へ進めないのではなく、馬力(horse power)で一気に押すいわば 360° 回転式で動力を与える道具(instrument)の開発(making, invention)となる。

ともかくも英文がスピーディーにスラスラと動的に回転よく reading できないのは心の中に文中の各語の慣用的な共起 pattern に基づく lexicon、すなわち mental dictionary が自分に備わっていないことであり、理想であるが英文を母語話者のようにスラスラ読むためには徹底的な反復 reading による **pattern recognition practice** で身体（脳）に覚えさせ内在化(internalize)することが必要となってくるはずだろう。

３つ目の文での Bad Trade Deals, Endless Wars は RHEME：VP の N_2 とみたい。この text 文には STR(stratum)［文層］が３層のものが２つあるが、listening でも hearing 力が確かなら、そして上で見た you name it, shot の意味が既知であれば特には理解上で負荷はかからないであろう。

hearing 力と言ったが、本連載でたびたび触れていることで日本人の民族聴覚脳にはフワフワとした声の抑揚としての intonation だけが聞こえリズムに乗った sound が聴けないのである。intonation でたとえば DJ 調のものはきわめて特徴があるが、すべて聴ける。日本人は聞こえる英語の intonation ばかりを聴いていて sound に耳が開かない。諸々の物理学的 acoustic impedance（音響インピーダンス・音響障害）の下で本物の英音のかもし出すモノラル音的(monophonic)でないステレオ音的(stereophonic)な響きとなる空気圧・周波数の違い、また酸素の吸入と二酸化炭素の排気に伴う呼吸法(breathing tactics)の違いによる化学的・物理学的空気質への注目となる旨は本連載(71)でも言った。日常的にテレビなどから聞こえてくる英音を聴いたとき、並行的にその英音を影のように心の中で反復する shadowing（シャドーイング）で追う習慣をつけるとよい。有効な pattern practice ともなる、shadow（影）は Basic 世界語彙 **shade** と同系。

(2) BIG COURT WIN against Bolton. Obviously, with the book already given out and leaked to many people and the media, nothing the highly respected judge could have done about stopping it … BUT, strong & powerful statements & rulings on MONEY & on BREAKING CLASSIFICATION were made … Bolton broke the law and has been called out and rebuked for so doing, with a really big price to pay. He likes dropping bombs on people, and killing them. Now he will have bombs dropped on him！ 🙁 (June 20, 2020)

▲（文中の破線は原文どおり）。これは本連載(75)の(2)cf.との関わりで扱ったものとつながる内容の tweet である。大統領選を数か月後に控えかつての側近 Bolton 氏の著で内容が事前に漏れていた暴露本？に関し、政権側は機密情報が含まれる出版物だとして首都 Washington D.C.の連邦地裁(U.S. District Court)に提訴していたがそれが棄却されたことを受け Trump 氏がつぶやいている。大文字書きの語（句）、& 記号の用い方はカジュアルな書き方スタイルでまさにこれも Trump orthography（トランプ正字法）と言える。音声的にもやはりいわゆる語強勢など固定したものはまるでないことがよく分かる（関連し上述もした）。

「裁判所の大勝利で Bolton の敗けだ、明らかに彼の本はすでに出回っていて多くの人やメディアに漏れているので判事も差し止めでは何もできなかったのだろう、しかし金銭面と機密保持の点で法律違反だという確かな声明と裁定を下した、Bolton が法を破ったその代価は実に大きい、彼は人に爆弾を落とし殺すことが好きな人物だが今度は自分に爆弾が落ちることになるぞ！」という metaphoric な内容である。

法律家の道具は法律文となる。instrument には「法律上の証書」の意味があり常識であることはすでに触れた〔本連載(74, 76)参照〕。文中の broke the law は法律での道具たる「文書・証書」を破った意味となる。上の tweet 文では bomb（爆弾: gunfire）が人の命を絶つ道具となっている。

道具といえば Ogden-Richards は *The Meaning of Meaning* (p.9)で Triangle of Reference（意味の三角形）との絡みから“… we say that the gardener mows the lawn when we know that it is the lawn-mower which actually does the cutting, …”「芝を刈るのは現実には動力をもつ機械の芝刈り機であり人間の庭師ではないのにわれわれは＜庭師が芝を刈る＞という言い方をする」と述べている。文 The gardener mows the lawn.は深層格(deep case)として the lawn (= grass) in the garden が位置格(locative)で、lawn-mower

(= grass cutter)が具格(instrumental)となる。EP 本の謎も透かし見えてくる重要なポイントの１つである。

文中で２つの破線語 with とともに、nothing の語配列には要注目。‘nothing’ は上の(1)で言った**「問い返し疑問文」の echo-question** と並行させれば＜the highly respected judge could have done **‘what’**? about stopping it＞ ⇒ the highly respected judge could have done nothing about stopping it となる。

太線語 obviously は {ob (= on) + vi (< via = way) + ous + ly} で on the way、すなわち「道中にいる→目立つ」の意味である。Basic 世界語彙 **way** とともに **wave, weight** とも同系である。way は元来が荷物を運ぶ「道」のこと、wave は荷物を運ぶ道を「手招き」をして示すことであった。weight は荷物の負荷としての「重さ」の意味ともなった。非世界語彙では wagon（荷車）が同系で、ゲルマン系の先頭音[w]がラテン系で[v]となり via, vehicle, voyage, conveyer などが同系〔拙著(2016)、松柏社、第二部、例(15)参照〕。

文中で波線としておいた made の原形 ‘make’ と ‘have’ の本来的な意味(root sense)の把握はよいだろうか？英語の演算子(operation word)としての特に ‘make’ に関しては今後機会をみて改めて確認もする。

なお、前回の確認事項であるが文中で下線とした接続詞 But と同系の Basic 世界語彙は何？「外へ向くこと」で out である。一方、and は「中へ向くこと」で in と同系〔同上拙著、例(130), (131)参照〕。

have bombs dropped on him（彼に爆弾が落ちる）中の ‘have’ には語彙素(lexeme)としてのその本来の語感を感知させもする。have の由来・原義は「獲物の頭をつかみ取ること」で、morphoglosseme（形態言素形：MG）/ morphophoneme（形態音素形：MP）は語頭が/K/の/KAP/である〔一連の同系語の例を含めて同上拙著、第二部、例(2)参照〕。また、bombs（爆弾）は擬音語であることもここで確認しておきたい。

今度はこの tweet の下線部のみを動き回転する仕掛けをもつ ASMOE 母型で見てみる。上で言ったが特にスロット（グリッド）中で N_2 の nothing に注目するとよい。この nothing の配置が瞬間に見定められる力も英語力を推し量る１つのバロメーターとなる。特に発話されたものと想定した場合、リズムの流れの中でその **thematic-rhematic pattern（主題 - 題述パターン）** が難なく見抜けるか？ということになる。

STATEMENT					
		THEME: NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N_1	COP／V	N_2／N_3／A	ADV
1	ϕ	ϕ	ϕ	BIG COURT WIN /	against Bolton. //
1	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	Obviously,
2	with	the book	already given out	ϕ	ϕ
3	and	ϕ	leaked	ϕ	to many people and the media, /
4	ϕ	ϕ	ϕ	nothing →	ϕ
5	ϕ	the highly respected judge	could have done	ϕ (= nothing)	about
6	ϕ	ϕ	stopping	it… //	ϕ

（備考）単一斜線（／）は各文での意味的２分割線、各項は**(3±α)語**として実現する。常にこの**(3±α)語による各項の他との結合法を追う**のである。表中の矢印（→）は倒置語〔STR 5 の N_2 参照〕。

最初の文での BIG COURT WIN は It was a BIG COURT WIN ということになる。いわゆる代名詞(pronoun)の it は何かと重宝な語である。２つ目の文でのいわゆる attendant circumstances（付帯状況）を導く with は CC とし、STR 2, STR 3 のように考えたい。この文は文層の深い６層で、意味理解上での負荷がかかる。なお、この tweet にはもう１つ破線で示した with があるが、これも類似のもの。

ここでは nothing が STR 4 に入り、これが STR 5 の done と結びつき … could have done nothing about stopping it … として STR 6 につながっていく〔上述事項、参照〕。nothing はいわゆる倒置(inversion)である。また、about は with respect to (～に関して)などと置き換わるわけで ADV と考えればよい。

（試問）（Ⅰ） 文中の次の語（*court* はプラスαBasic 世界語彙、他は非世界語彙)と**同系の Basic 世界語彙**の例を各々２語だけ列挙すれば何があるか？（いずれも本連載で扱ったもの）。

1) *court*　　2) already　　3) media

(II) 上で代名詞の it に関し触れたが、「代名詞」(pronouns)を **Basic 世界語彙**で言うとして次の括弧内に Ogden 自身が著作で名詞を形容詞(quality)としてよく用いる r で始まる１語は？

pronouns = words (r　　) of names

(III) 上の試問**(I)**の 3)で media（単数形は medium）を見たが「マスコミ」の意味では複数形で用いる。英語には sheep など単複同形の語もあるが、日本語の「英語の sheep は単複同形語である」を Ogden 自身が **Basic 世界語**で用いた言い方で表現すれば？

……

［正解例］ (I) 1) **curtain, garden**（語頭音[k]⇔[g]）など〔解説は同上拙著、第二部、例(114)参照〕。
2) **ready, road** など〔同、例(16)参照〕。3) **middle, medical** など〔同、例(28)参照〕。

［正解］ (11) **representative** 〔‘be representative of’… は「～を言い表す、～を示す」の意味で重要〕。
〔**備考**〕所有の Whose hat is it？ It is his. などでの whose, his, etc.は EP 本ではどう扱う？

［正解例］(III) In English the word ‘sheep’ has no form of more than one.　　(2026.01)